

# 佐同教だより

佐賀県人権・同和教育研究協議会

住所 佐賀市大和町大字川上 佐賀県教育センター 研究調査棟内  
TEL 0952(62)6434 FAX 0952(62)6435

あいさつ

## 一人ひとりの人権が大切にされる社会の実現をめざし、

## これまで以上に、力強い取り組みを



佐賀県人権・同和教育研究協議会 会長 大塚 稔

まずは、会員の皆さまに対し、それぞれの立場で、日頃より差別の解消と人権の確立された社会の実現に向け、人権・同和教育の実践・研究及び啓発にご尽力をいただいておりますことに感謝申し上げます。

さて、人権の世紀と言われる21世紀も10数年を経過しておりますが、現状を見ますと、行政機関の窓口には被差別部落の場所を問い合わせる事案や、賤称語を用いて人を中傷する封書が届くという事案、学校現場での相手を中傷するために賤称語を用いる事案、結婚差別、インターネット上での差別書き込み等が未だに発生しています。昨年、2012年度には、佐賀県内のある市町において、休日の電話対応をした委託警備会社社員が同和教育に係る差別発言を行うという事案も発生しております。市

町の管理下の窓口でこのような事案が発生したことは誠に残念であります。この事案に関しては、7月4日に学習会が行われましたが、その場で6つの問題点が指摘されました。このことについては佐同教としても、今後、研究を深めていきたいと思いません。

また、最も安全で安心な場所でなければならぬはずの学校現場において、いじめや体罰を背景として自ら命を絶つという悲惨な事件もありました。これらの問題について学校の対応の在り方・コンプライアンス体制、さらには、教育委員会の責任体制が大きく問われた年でもありました。

わたしたちは、「誰もが生まれてきてよかったと思える社会づくり」を主題のもと、人権・同和教育、啓発の推進に取り組んで

きましたが、前述の事件・事案の発生は、あらためて課題と責任を突き付けられたものと考えています。佐同教のこれまでの成果をさらに発展させ、社会教育、学校教育の両面から、また、連携を深め合いながら、一人ひとりの人権が大切にされる社会の実現をめざし、これまで以上に、力強い取り組みを進めていくことが求められています。先の総会においても、2012年度の佐同教の取り組みを振り返り、あらためてこれからの人権啓発・人権教育・人権のまちづくりの必要と重要性を明らかにし、2013年度、さらなる研究の深化とチームワーク・ネットワークづくりを推進することを確認したところです。一人ひとりの人権が大切にされる社会の実現に向けて取り組んでいきたいと思います。

# 子どももたちに笑顔を

## 取り戻すための教育を

2013年度第44回佐賀県人権・同和教育研究協議会総会並びに研修会

### 総会

県内の学校教育・社会教育関係者など406名が参加して、佐賀市のメートプラザ佐賀に於いて、今年度の総会並びに研修会が5月24日(金)に開催されました。

来賓祝辞の中で、井上隆司部落解放同盟佐賀県連合会執行委員長は、原発や貧困、格差社会の問題、スイスのジュネーブで報告された教育に関する内容などから、子どもたちを取り巻く環境の悪化がいじめや体罰の問題を大きくしていることを訴えられました。

総会では、二〇一二年度の事業報告・総括・会計決算報告及び監査報告、二〇一三年度の役員選出・研究課題・事業計画・会計予算案など審議され、承認されました。

また、市町村合併による新たな行政の枠組みにもなつての、各同研の名称変更についての問題提起がなされました。このことについては、今後、各同研で話題にしてほしいとのことでした。

二〇一三年度の研究課題については、何



を課題として、どのように解決していくのかをしっかりと考えていくことの重要性や企業研修・地域の方への研修を密にしていこうとの大切さを話されました。そして、会場からは、「大人が自分の生き方を見直すことが子どもたちの未来につながるのだ。」「教育・就職・結婚の差別をしっかりと教えてほしい。」などという意見が出されました。

これに対し、佐同教では、目の前の苦しんでいる子どもたちに笑顔を取り戻させるために、これからは人権・同和教育を推進していくことを提言しました。

### 研修会

総会後の研修会では、野口誠也さんに、熊本県の取り組みや教頭時代の三年間の中学校とその後の小学校で出会った子どもたちの話を中心に講演をしていただきました。

以下、講演の概略です。

#### ◆熊本の現状

熊本では、子どもたちの自殺を受けて、命を大切にすることを育む指導の充実がなされている。具体的には、児童・生徒に校長が心を育む講話をしている。しかし、賤称語発言、水俣やハンセン病に対する差別、同和地区を尋ねる問題などが起こっている現状がある。

#### ◆中学校での取り組み

いじめで自殺が問題になった時期、生活アンケートを実施。その時、差別発言があった。また、同じクラスにいた知的「障がい」者に対する配慮のない内容のフアックスが学校に届いた。このことがきっかけで、子どもたちと学習会を持つ。知的「障がい」者に対するこれまでの取り組みが本物であったかどうかを子どもたち自身にぶつけ考えさせた。

#### ▽フアックス内容への子どもへの反応

「噂だけを信じている。実際にクラスにきてみると学ぶことがたくさんあるのに。」「自分の差別性に気づかされた。」などの意見が生徒たちから出された。



合志市立西合志南中学校校長 (熊本県人権教育研究協議会会長)

野口 誠也 さん

講演 「いじめや差別をなくす力を子どもたちに」として 学校に

▽別のクラスの先生の語り

生まれてくるわが子に「障がい」があると言われ、そのとき初めて自分の差別心に気づかされた。心の中に「障がい」者への同情などがあつた。自分は今でも苦しんで生活している、ということが差別心であつて、これをなくすために頑張つていきたいという内容の話であつた。

▽部落問題との出会い

野口さんは、自身のことを生徒たちに話した。その中で自分のことを語っても、他人から同情をもらうことを期待してはいけないことや、語ることは自分の壁を超えるということなどを生徒たちに訴えてきた。

▽差別発言をした子の語り

自分の家族のことを話す。「いつも兄と比較されていた自分。しかし、父や祖父から『自分は自分』と言つて、認めてもらつたことで救われた。」と話してくれた。

▽卒業式前日

学習会を通して、「部落問題学習の本当の意味を知った。」「差別発言は一人だけでなく、すべての人たちを傷つける。」という意見を生徒が出してくれた。また、被差別地区出身の子は「言ったことは消えないが、これから一緒に学習していこ

う。」という前向きな意見を言ってくれた。野口さんは、この学習から部落問題学習の質など課題はあるが、子どもたちがうつつかずに卒業していったことが良かったと思うという感想を述べられた。

◎「なかまがふえた日」

小学校で力タカナ名前の転入生。転入当初、からかいを受けていたので、事実確認や本人・親の思いを聞き、学級で人権教育に取り組む。親から韓国の学校の様子などを、また、子ども自身の語りを聞く。学級での話し合い、そして、人権集会、子どもへの語りへと活動が広がる。その結果、本人は、最後に韓国人としての誇りを持った手紙を残す。また、手紙には、いじめがなくなったことへの感謝の言葉が綴られていた。

◎終わりに

野口さんは最後に、「ここで出会つた生徒・児童によって自分のことを語つたり、綴つたりしていくことの大切さを改めて知つた。今は『認め合い・励まし合い・高めあい』を目指していることや『イエス・ウイ・キャン』を実感できる取り組みが大切だと話をまとめていただきました。

参加された方の感想より

・「差別の現実から学ぶ」という点から大変考えさせられる内容でした。  
・人権・同和教育の大切さを改めて感じました。

## 報 告

## 部落史研究の成果を教育・啓発に

## 人権社会確立第33回全九州研究集会に参加して

去る5月30日(木)、31日(金)の両日、宮崎県のフェニックス・シーガイアリゾートで九州各地から約4千人が参加し、人権社会確立第33回全九州研究集会が開催された。

1日目は、全体会で挨拶・基調提案がなされ、人権をめぐる情勢の特徴と差別事件・人権政策確立の取り組みや狭山事件の取り組みから、反差別の視点を軸に人権のまちづくりを推進していくことが話された。その後、パネルディスカッションでは、全九州水平社創立90周年記念にあたって、4名のパネラーとコーディネーターからそれぞれ思いが語られた。

この90周年にあたり、記念誌が発刊されていいて、膨大な写真資料を見ていると、歴史の重みを痛感し、あらためて部落差別に対する怒り・憤りを覚えるとともに、人権を守る戦いの足跡を知ることができた。

2日目に参加した第4分科会「被差別部落の歴史と現在」では、近年の部落史研究の深化・進展が従来の部落史の認識を大きく変えてきていること、部落史以外のアプローチがあり、多様な被差別民をキーワー



ドとする研究も進化していることが報告された。九州

における被差別民の歴史は、まだまだ研究の段階だが、今後さらに明らかにされる可能性が大いにあり、近年の部落史研究から、教育現場にその研究成果をどう実践に生かすか課題になっていることが報告された。

報告1では、宮崎県の先生から、中学校での歴史の授業で、太鼓作りの学習を通して当時の人々の差別の歴史や差別への抗い、被差別民側に立った思想家がいたことの実践報告がなされた。

報告2では、鹿児島市の先生から、子どもたちの差別発言の背景には、脆弱な部落史学習や身の回りにあるさまざまな読み物から間違った知識を得ていたことから、1年間を通じた部落史学習に取り組んだ実践

が報告された。当初の「かわいそう」や「を知らなかった」という感想から、「部落産業や汚染一揆」、「水平社創立」「石川さんの手紙」の学習を進めていく中で、子どももの感想が、「差別をしたらいけない。差別する人は最低だ。差別は、がんばればきつとなくなる」という考えになった。」などの変容が報告された。

報告3では、福岡県の竹永茂美さんから、「全九州水平社創立90周年誌を作成して」というテーマで報告があった。福岡県人権研究所の「松本治一郎・井元麟之研究会」は、兩名の残した膨大な資料を整理し、戦前・戦後の主な事業・項目ごとに分類を行い、全国水平社・全九州水平社創立の時代から今日までの史料から、水平運動・解放運動の足跡と差別をなくしていきたいという思いの詰まった記念誌を作り上げた。

この歴史的資料の記念誌が各県の関係者の並々ならぬ努力の結果、作成されたことに敬服しながら読ませていただいた。

部落史の研究が進み、教科書が変わってきていることをしっかりと受け止め、今まで受けてきた教育の誤った歴史観やあいまいな記憶・作られたイメージのままではいけないと痛感した2日間でした。これからの研修・研鑽に大いに参考になり、有意義な研修会になりました。

(小城市社会教育指導員 木村 博重)